

# 日本統治時代の台湾建築と小野木孝治†

Wang Shenying\*, 星和彦\*\*

## Taiwan's architecture and Takaharu Onogi in the Japanese colonial period†

Wang Shenying\* and Kazuhiko Hoshi\*\*

From 1890s I of Meiji era, Japanese architects introduced elements of their understanding of the Western architecture into modern Japanese architecture to reflect the contemporary Japanese architecture of the time. Due to the particular historical background, as opposed to the Japanese mainland, Taiwan was like a fresh unpainted piece of paper, which became the paradise to showcase all architects' talent. The Japanese Red Cross Society Taiwan branch government office building, a hospital and the Government-General of Formosa central institute were the work which has a good reputation most as a work of Onogi in the Taiwanese age. Sovereign's momentum was indicated by new construction of the Western style built of brick in those days. On the other hand, government office building construction in XinZhu, YinLan, TaoYuan, MiaoLi, NanTou, DouLiu's government office building often depended on brick construction. This study looks into Taiwanese architects and their works in the Japanese colonial period(1895-1945), and examine their current status.

**Key words** : Takaharu Onogi ,Taiwan's architecture, Manchu construction proceedings, Colony construction, Japanese colonial period

### 1. はじめに

明治維新以降，日本建築は欧米から大きな影響を受けた。欧米化は，1879年（明治12）に工部大学校造家学科から始めての卒業生がでて，次第にアカデミックな要素が加わっていく。こうした日本人が活躍を始めるのは明治20年代からとみられる。こうして，辰野金吾，妻木頼黄，片山東熊など，第一世代の日本人建築家たちは，日本に西洋建築を実現させる役目を担い，「近代日本」の建築像を作り上げていった。

一方，彼ら，とりわけ辰野は，工部大学校で教鞭をとり，日本のアジア植民地建築に深く影響を与えた多くの日本人建築家を培った。日本人建築家たちにとって，明治維新以降，日本最初の植民地としての台湾はまるで白紙のような楽土であり，独自の理解を加えて腕を発揮する空間でもあった。本研究は日本統治時代の台湾（1895-1945）に渡った日本人建築家たちと，彼らの手で作り上げられた台湾建築について，建築家の小野木孝治の活動と作品を対象として検討をおこなう。そして，日本統治時代の台湾建築の歴史と，それに影響を与えた日本人建築家について研究の現状を明確したい。

### 2. 研究背景・目的

台湾で建築家として作品を残し，台湾建築の歴史に影

響を与えた日本人建築家には小野木孝治，森山松之助，野村一郎，近藤十郎，長野宇治平などが挙げられている。こうした建築家の活動や日本統治時代の建築史研究は，1990年代以降，台湾総督府の公文書が公開されて可能になった先行研究は進んでおり，これまで解明できなかった部分が徐々に明らかにされてきている。しかし，多くは建設後100年以上の時間がたち，また台湾の都市発展により，日本人建築家たちの作品はすでに解体されたり，あるいは構造や構法の変化により修繕が難しくなっており，取り壊される場合も目立っている。したが

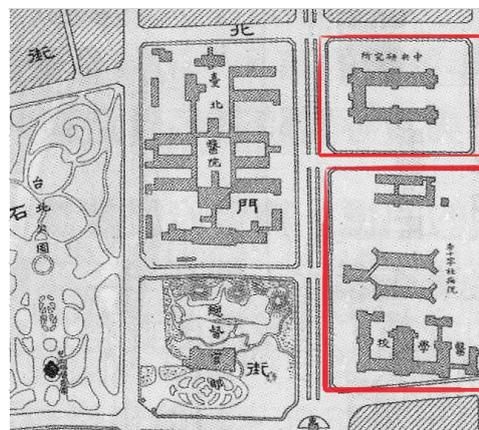


Fig. 1 Site plan of office of government-general of TaiWan

† 原稿受理 平成28年2月26日 Received February 26, 2016

\* 建築学科 (Department of Architecture)

\*\* 学長 (President)

って、小野木孝治をはじめ一部の日本人建築家の研究は、文献史料でのみ可能な場合もでてきている。一方、旧満州建築についての史料整理と公開の進展で、台湾からのちに旧満州に渡った日本人建築家についての研究も可能となってきた。こうした史料の検討から、日本統治時代の台湾建築の研究はさらに補充されると考えられる。台湾植民地や旧満州の資料はおよそ 45 年間封印されてきたが、このように現状として、研究として取り上げられる史・資料の調査・整理できるようになった。本稿では、『台湾建築協会会誌』と『満州建築協会雑誌』を主な研究対象とした。

### 3. 台湾時代の小野木孝治と作品

Table 1 Works of Onogi in TaiWan

	建物名	外観の特徴	現状
1	日本赤十字社台湾支部庁舎及び病室	煉瓦造平屋及び二階建。明治37年。当時では十分にハイカラな作品	解体 (1994)
2	台湾総督府中央研究所	煉瓦造二階建。明治39年。中央部を建築	解体 (1998)
3	台北市文武町警察官吏派出所	煉瓦造平家。明治36年。渡台最初の作品	解体
4	財務局長官舎 (部分)	木造二階建。明治37年。土木局長官舎の増築	解体
5	新竹庁舎	煉瓦造二階建。明治39年頃。当時の地方庁舎建築	解体
6	宜蘭庁舎	煉瓦造平屋一部二階建。明治39年	建直し
7	桃園庁舎	木造平屋家一部二階建。明治38・39年	解体
8	苗栗庁舎	煉瓦造平屋一部二階建。明治39・40年	解体
9	南投庁舎	煉瓦造平屋一部二階建。明治39・40年	解体
10	斗六庁舎	煉瓦造平屋一部二階建。明治39・40年	解体
11	古亭庄配電所	煉瓦造一階建。明治38年	解体
12	新公園変電所	煉瓦造一階建。明治38年	解体

小野木孝治は、明治維新直後の明治 7 (1874) 年、神奈川県鎌倉郡に生まれ、日中間の戦争が本格化しつつあった昭和 7 年 (1932) <sup>注1</sup>、大連で亡くなった。小野木は、明治 32 年 (1899) に東京帝国大学工学部を卒業し、明治 35 年 (1902)、辰野金吾、中村達太郎の両博士の勧めもあり、東大建築科の講師となった。さらに同年 10 月、小野木は台湾総督府技師として赴任した。一方、台湾総督府建築課長として勤務しているにも関わらず、明治 40 年 (1907) 2 月、満鉄会社に招聘された。小野木は台湾で在官のまま満鉄職員となったわけである。招聘されるにあたり、明治 45 年 (1912) には 6 カ月間欧米各国へ出張している。満鉄会社の創業は明治 39 年 (1906) のことであったが、明治 45 年から大正 12 年までの 17 年間、満鉄会



Fig. 2 Japan Red Cross TaiWan Branch and its hospital

社の最も盛んであった時代に、小野木は全線に亘る鉄道関係施設の責任者として従事した。またその過程で、旧満州建築協会と会誌を創立した。すなわち、小野木は 1920 年に満州建築協会を設立し、1921 年にその機関誌を創刊したのである。当時の建築施設の殆どのが小野木の意図を汲んだものであったといえることができる。昭和 5 年 (1930) 共同建築事務所の経営より引退した。昭和 7 年 (1932) 12 月 18 日、小野木は心臓麻痺に脳溢血を併発し亡くなった。享年 59 歳であった。したがって、本研究では小野木の台湾時代 (1902-1907) の作品が主な考察対象となっている。

### 4. 日本赤十字社台湾支部庁舎及び病院

日本赤十字社は明治 32 年 (1899) に台北で台湾支部を設立し、明治 37 年 (1904)、「日本赤十字社臺灣支部醫院」が台北東城門外で竣工した。煉瓦造二階建及び平家の建築で、当時は十分ハイカラな建物といえる。小野木は車椅子の使い勝手を考え、建物内部一階



Fig. 3 General office of Chinese national party (ex-Japan Red Cross TaiWan Branch)

の廊下を設計した時、勾配に配慮していたと言われであり、この建物は現在の視点からすれば、台湾最初のバリアフリー建築と言えるかもしれない。<sup>注2</sup>

当時の日本赤十字社台湾支部庁舎及び病院は教学の役割も担っていた。それは台湾に杜聡明、蔣渭水などの医学博士を培ったからである。この人たちは後台湾の「救世主」と呼ばれた。赤十字社は医療関係者の養成が主な事業となっているが、戦時中また事変中は海軍の負傷者などを収容したり、貧しい患者を救済したりした。急な事変が

起こった時、例えば震災などの時、医師と看護婦の特派を  
 実行した。小野木が最初に設計した建物であった時計  
 塔は昭和5年(1930)に撤去された。<sup>注3</sup> 昭和11年(1936)  
 3月総督府医学校の部分は台北帝国大学区に合併され、  
 後に赤十字社部分は台北帝国大学により買い上げられた。  
 元の赤十字医院は東門町から泉町に移っており、第二次  
 大戦後は国民党中央党部の総部として使われていたが、  
 1994年に解体された。旧跡は現在、台湾大学附属医院新  
 院区である。

これは小野木孝治が台湾の総督府営繕課に赴任した  
 後、最初に設計した作品であった。また台湾時代の小野  
 木の作品の中で、一番長く利用されていた建物であった。

### 5. 台湾総督府中央

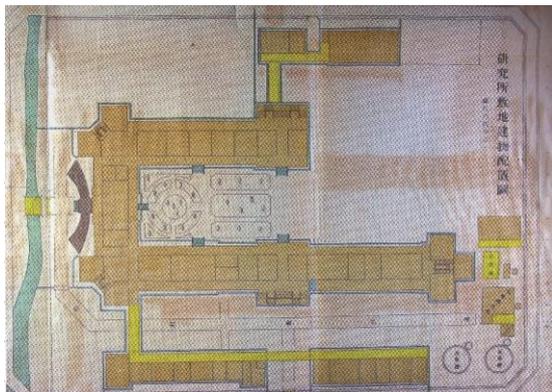


Fig. 4 Plan of central research office

日本はアジアでの領土を拡大した一方、台湾及び南ア  
 ジアに関する調査や研究もさらに重視していた。この背  
 景の下、明治39年(1906)、台湾総督府中央研究所が小  
 野木の設計によって、建築計画が立てられ始めた。しかし、  
 まだ中央研究所の設計に着手したばかりの翌年、明治40  
 年2月に、小野木は満鉄に赴任することになった。未完成  
 の設計は、後に近藤十郎が続けて担当した。後藤、高崎、  
 中村五一、神田などを助手とし、堀内商会が施工を担当  
 した。明治42年(1909)部分的に完成し、大正元年(1912)  
 にすべての工事が終了し、全面的に使用されることにな  
 った。先行研究<sup>注4</sup>によると、最初に閑静・使用されたの  
 は小野木設計した側方の部分だと推測される。正面の主  
 体となる部分は近藤十郎により設計された可能性が高い。  
 建物の屋根はマンサード式で二階建の巨大な煉瓦造の建  
 物である。一階と二階の両側にゴシック様式のベランダ  
 を設置したが、近藤は小野木のルネッサンス様式のデザ  
 インを合わせるよう設計したため、全体には統一性は見  
 られる。中央研究所の下に農業部、林業部、工業部、衛生  
 部などが置かれ、化学、電気、園芸、茶業などの実験所  
 も設けられていた。当時では非常に規模が大きい、重要な  
 存在であった。1989年解体され、旧跡は中山南路教育部  
 である。

### 6. 庁舎建築

明治34年(1901)、台湾は二十一庁に分けられ、新竹

庁は二十一庁の一つになり、さらに新竹庁は桃園郡、中  
 壠郡、大溪郡、新竹郡、竹東郡、竹南郡、苗栗郡、大湖  
 郡の八郡に分けられた。

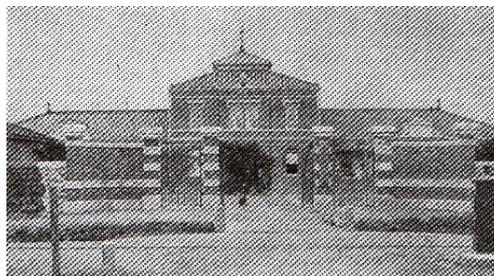


Fig. 5 YiLan local office



Fig. 6 XinZhu local office

その中、桃園郡、新竹郡、苗栗郡の庁舎は小野木の設  
 計であった。残念ながら建物は現在ほとんど残されてい  
 ないが、当時の写真から垣間見ることはできる。

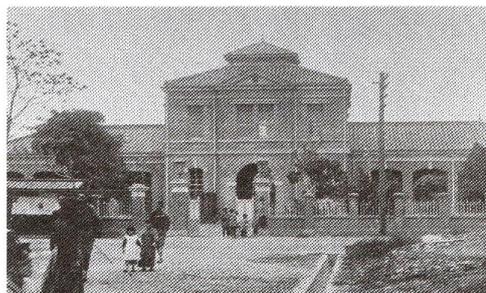


Fig. 7 DouLiu local office



Fig. 8 NanTou local office

## 7. 宜蘭庁舎

明治 39 年 (1906) に建築され、前後、左右対称の「回」字形をした平面となっていた。ゴシック様式の建築として建てられた。宜蘭県政府の発展によって、1974 年鉄筋コンクリート建築に改築され、その後解体された。

## 8. 変電所

台湾時代の小野木孝治は都市を発展させるため、都市が必要とした施設を多く設計した。その中には、電力施設が含まれている。台湾は日月潭と門牌潭をはじめ、多くの河川が流れ、その流路の落差が大きいため、水力発電に適切な自然環境に恵まれている。



Fig. 9 GuTingzhuang substation

先行研究<sup>注5</sup>によると、明治 36 年 (1903) 11 月台北電気作業所が設置され、最初の工事は亀山に第一発電所であった。新店溪の支流と南勢溪の水流落差を利用し、古亭庄配電所に配電した。



Fig. 10 Xin Gongyuan power distribution station

この古亭庄配電所は明治 38 年 (1905) に、小野木孝治が設計し、図面製作を高崎才蔵が担当した。施工は澤井組により実施された。新公園変電所は尾辻国吉の設計により<sup>注6</sup>、明治 36 年 (1903) 12 月から明治 38 年 (1905) 7 月の一年間で竣工した。煉瓦造の一階建の建築である。主に城内、艋舺、大稻埕の三つの市街に配電していた。

工事費用は 57 万 5 百余圓<sup>注7</sup>であったため、当時の澤井組が行った第二の大工事 (大稻埕護岸工事に次いで) である。<sup>注8</sup> 同年、新公園変電所 (第二発電所、後変圧所に改造) は小野木孝治と尾辻国吉により設計され、同じく澤井組が施工を担当した。

## 9. まとめ

日本赤十字社台湾支部庁舎及び病院と台湾総督府中央研究所は、台湾時代の小野木の作品として最も評判が高い作品であった。当時では煉瓦造の西洋様式の新建築によって統治者の勢いを示した。一方、新竹、宜蘭、桃園、苗栗、南投、斗六庁舎の庁舎建築は煉瓦造によることが多かったが、桃園庁舎だけは雨淋板 (下見板) 構造であった。また、庁舎建築の屋根の様式は初期の赤十字社の設計と比べて短くなり、建物の全体のバランスがやや崩れているように思われる。先行研究<sup>注9</sup>によると、小野木孝治は設計のみを行い、建築施工に参加しなかった可能性が高い。また、各地方の財力により、材料や設計を書き直された可能性もないわけではない。

今後は、台湾時代の小野木孝治についての研究をさらにまとめながら、満州時代の小野木孝治とその作品について続けて考察したい。

## 参考文献

- 1) “満州建築雑誌” (1933) 第 13 卷 2 号 p. 5 「臨終記」の内容を根拠にした。
- 2) 李乾朗, 20 世紀台湾建築 (2001), 玉山社出版, p. 29.
- 3) 尾辻国吉, “満州建築雑誌”, 「台湾時代の小野木先生」 (1933), 第 13 卷 2 号, p. 35.
- 4) 黄士娟, “建築技術官僚與植民地経営 1895~1922 遠流出版公司, (2012) p. 87.
- 5) 黄士娟, “建築技術官僚與植民地経営 1895~1922 遠流出版公司, (2012) p. 45.
- 6) 「明治時代の思ひ出 其の一」, “台湾建築協会誌”, (1941), 第 13 集 2 号, p. 89-95.
- 7) “台湾日日新報”, (1910), 5 月 1 日第 3 版.
- 8) “台湾日日新報”, (1910), 5 月 16 日第 4 版.
- 9) 黄士娟, “建築技術官僚與植民地経営 1895~1922”, 遠流出版公司, (2012) p. 139.
- 10) Fig. 1, 「台湾総督府庁舎新築予定敷地付近市街図」, “建築雑誌”, (1907), 日本建築会, 第 21 集 245 号 p. 276-278.
- 11) Fig. 2, “満州建築協会雑誌” 第 13 卷 2 号, (1933).
- 12) Fig. 3, “世紀台湾建築” (2001), 玉山社出版, p. 29.
- 13) Fig. 4, “台湾総督府報告第一回”, (1913).
- 14) Fig. 5, 6, 9, “台湾写真帖” 台湾総督府文書, (1908).
- 15) Fig. 7, “台湾写真帖第一集” (1915).
- 16) Fig. 8, “台湾写真帖” 台湾総督府文書, (1915).
- 17) Fig. 10, “台湾建築協会誌” 第 13 集 2 号 (1941).